

食品安全

2004
特別号

平成16年9月発行

食品安全委員会 季刊誌

日本におけるBSE対策を検証する

食品安全委員会は、9月9日、

プリオン専門調査会報告

「日本における牛海綿状脳症（BSE）対策について

—中間とりまとめ—」を了承し、公表しました。

そのポイントを解説します。



プリオン専門調査会吉川泰弘座長に聞く

プリオン専門調査会においてとりまとめられた「日本における牛海綿状脳症(BSE)対策について—中間とりまとめ—」が、9月9日の食品安全委員会で報告、了承されました。この報告の背景・経緯、ねらいなどについて、プリオン専門調査会の吉川泰弘座長に語っていただきました。

今回、日本における牛海綿状脳症(BSE)対策について検証を行った背景・経緯、ねらいについて教えてください。

吉川座長:ヨーロッパをはじめオーストラリアやアメリカにおいても、それぞれ自国のBSEリスクに関して公的な機関で分析が進められ、国民にわかる形で報告されています。我が国では2001年9月にBSE牛が発見されて以来、種々の対策がとられてきました。しかし、我が国のBSE汚染リスクがどの程度なのか、人へのリスクはどうか、とられた対策はどのような意味があり、どのような有効性を持つのか等に関して、専門的な分析はなされてきませんでした。と畜場で健康牛の全頭検査に関するデータ、とられた対策に関する実行性の調査データ、あるいはヨーロッパなどで得られたデータが蓄積されてきた現在、これまでのデータを分析し、できるだけ科学的、定量的に日

本のBSEのリスクおよびとられた対策について評価を試みることにしました。本中間とりまとめは、日本が自国のために公的な機関で、初めて分析したものです。調査会は毎回公開で行われ、中間とりまとめに関しても各地で説明会が持たれています。情報の公開、説明責任を果たし、国民の方々が安全性を判断する基盤となるように心がけました。

どういったところにポイントがあったとお考えですか。

吉川座長:本中間とりまとめの中で行われたリスク評価では、ゼロリスク(100%の安全性)はないことを基本としています。他方、科学も決して万能でないことを認めています。分析対象としたデータには不足のものが、またプリオンおよびプリオン病そのものについても多くの不明な点があることを認めています。その上で、データ解析には、それぞれわかっ

ていること、わからない点を明示しました。また評価には不確実性がともなうことも示しました。

こうした困難な点はありますが、できるだけ定量的、科学的評価を心がけました。本中間とりまとめでは、我が国の公的機関として、はじめて日本の変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)患者の出る確率について述べ、またと畜場で検査される健康な牛の全頭検査の意味と検出感度の限界について確認した点は重要なポイントです。また食肉の安全性確保には、特定危険部位の除去および食肉検査としてのBSE検査の組み合わせが有効であること、しかし、それぞれは単独に100%の安全性を保証するものではないことなどを説明し、サーベイランスとスクリーニング検査の特性の違いを明らかにしました。専門用語が多く、わかりにくい点もあるかと思いますが、国民の方々が食肉に関する安全性を科学的に考えられるように努力しました。

中間とりまとめについて

これまでの350万頭の検査結果を踏まえると、日本では、BSEの汚染状況にイギリスとは大きな違いがあること等から、食品を介して人にvCJDがおきる可能性はかなり低いと考えられます。さらに現在、①BSE病原体の99%以上が蓄積する牛の脳やせき髄などの特定の部位を取り除くこと(特定危険部位(SRM)の除去)、②検査によってBSE感染牛を摘発すること(BSE検査)の2つの措置がとられていることにより、人への感染の可能性は効率的に排除されています。

ただし、BSE検査には、技術的な限界があります。潜伏期

間中の若齢牛などで病原体がごく微量の場合、検出できません。このような牛に関して、検査対象から外したとしても、特定危険部位の除去が行われていれば、それによってこれまでと同様に安全性が確保されることには変わりはありません。

牛から人への感染を防ぐ上で大事なことは、特定危険部位の除去も含め、管理措置を適正に行うことです。また、牛から牛へのBSE感染をしっかり防いでいくことも忘れてはならないことです。

これらの取組を確実に実行していくことが重要です。

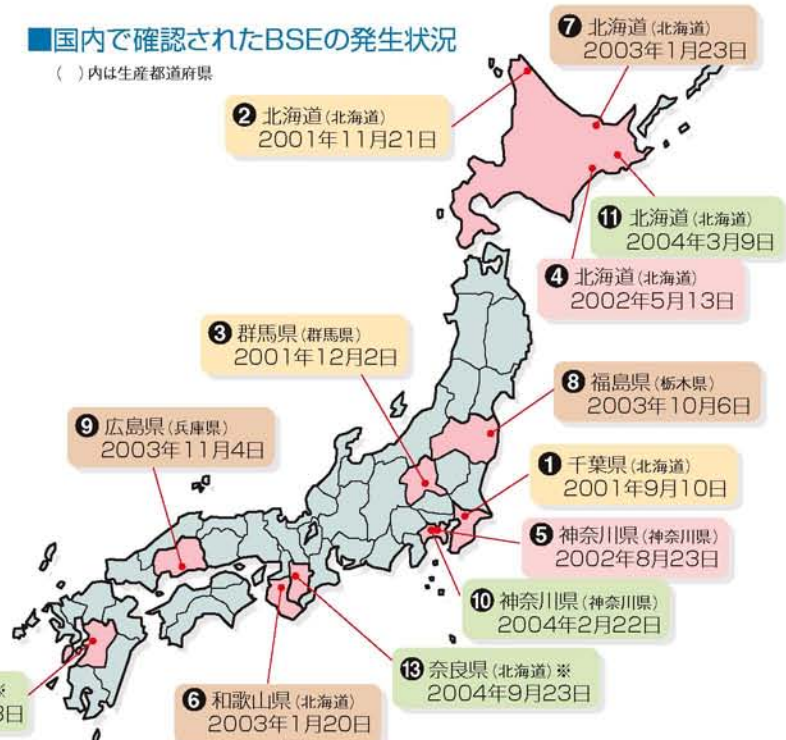
BSEとは？

BSEは牛の病気です。BSEに感染した牛では、BSEプリオンと呼ばれる病原体が、主に脳に蓄積することによって、脳の組織がスポンジ状になります。

牛から牛にBSEが蔓延したのは、BSE感染牛を原料とした肉骨粉などの飼料を使っていたことが原因と考えられています。国際獣疫事務局(OIE)の報告によれば、世界23カ国で約18万8千頭(2004年7月22日時点)のBSEが発生しており、英国がそのほとんど(約18万4千頭)を占め、日本ではこれまで13頭(2004年9月23日時点)が確認されています。

国内で確認されたBSEの発生状況

()内は生産都道府県



※「中間とりまとめ」以降に確認

「牛から人へのBSEプリオンの感染リスク」ってどういうこと？

BSEと同様、BSEプリオンが原因と考えられている人の病気に、変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)が知られています。これまでvCJD患者は全世界で157人、そのうち英国で147人確認されており、BSE発生頭数とともに集中しています。なお、英国以外の国でも、vCJD患者が発生しています(フランス-6人、イタリア-1人、アイルランド-1人、カナダ-1人、米国-1人)が、フランス、イタリア以外の国の患者は全員、英国滞在歴があります。我が国においては、vCJD患者は一人も報告されていません。

「牛から人へのBSEプリオンの感染リスク」とは、過去、現在、そして将来にわたり、BSEプリオンが食品を介して人に摂取されることにより、どの程度vCJDが発症するのか、ということ。

この中間とりまとめにおいては、2001年にBSE対策がとられる前に食品の流通経路に入り込んだBSE感染牛の頭数を2つの方法で試算したところ、それぞれ5頭、35頭と推計されています。このことを原因として、今後将来にわたって日本全体でどのくらいのvCJD患者が発生するかを、悲観的なシナリオの下で試算すると、5頭の場合は0.1人、35頭の場合は0.9人とされています。

なお、現在のBSE対策の下では、今後、BSE感染牛が発生したとしても、vCJDの発生リスクは、そのほとんどが排除されると推測されています。

■日本人口に当てはめたvCJDの感染者発生リスク推計

- (注1) 1996年以前に食品の流通経路に入ったと考えられるBSE感染牛のファーンガンによる推計値(1997年)。
- (注2) スミスらが推計したvCJD患者の最も悲観的な予測値。
- (注3) この値は2001年10月にBSE対策が講じられる以前に食品の流通経路に入り込んだBSE感染牛によるもの。

